

平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称 : ユニバーサルマインドをもつ女性人材の育成

機 関 名 : お茶の水女子大学

主たる研究科・専攻等 : 人間文化創成科学研究科・人間発達科学専攻 (博士前期課程、博士後期課程)

取組実施担当者名 : 石口 彰

キ ー ワ ー ド : 生涯発達、環境問題、社会問題、地域援助、多文化教育

1. 研究科・専攻の概要・目的

(1) 構成

人間発達科学専攻博士前期課程は、教育科学、心理学、発達臨床心理学、応用社会学、保育・教育支援の5つのコースで構成され、同専攻・博士後期課程は、教育科学、心理学、発達臨床心理学、社会学・社会政策、保育・児童学の5つの領域で構成される。

(2) 学生数、教員数

人間発達科学専攻博士前期課程の学生数は88名、担当教員数は30名(兼担5名)、同専攻・博士後期課程の学生数は110名、担当教員数は28名(兼担1名)である。

(3) 教育理念と人材育成

人間の心の発達と社会環境の発達に関わる幅広い学問領域を結集して、広い視野から学際的・総合的に教育研究を行うとともに、人間発達に関する個々の領域での専門性を高め、人間発達分野での社会的必要性の高い諸問題の解決を図る女性研究者及び専門的職業人の育成をめざす。

(4) 教育活動

上記の教育理念のもとに、人間発達科学専攻では、大学に限らず、他の多くの研究機関、教育機関、行政機関など、多様な分野に、これまで多くの優れた女性リーダーを送り出してきた。その集結として、平成14年、21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」、さらに平成19年には、グローバルCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」が認められ、本専攻はそれらプロジェクト遂行の拠点となっている。

2. 教育プログラムの概要と特色

(1) プログラムの理念と目的

本プログラムの名称にある「ユニバーサルマインド」とは、領域横断的な専門性を備えたマインドであり、国境・文化を越えた問題を共有できるマインドである。これを、女子大の特性と人間発達という専門性に当てはめると、人間発達の理解を核に持ちながら、国内外の、新たな社

会環境 (IT 環境や福祉環境など)、生活環境 (環境悪化や災害等) の問題を柔軟に・適応的に解決し、それを活かすマインドと言える。

本事業の目的は、人間の発達、特に心の発達と外部環境 (社会環境、生活環境) との関わり合いのダイナミクスを理解し、それを人間発達科学の専門分野に活かすという、現代社会から希求される新たな女性人材、ユニバーサルマインドもった人材を育成することである。

(2) 取組

本教育プログラムは、2本の柱を中心に、取り組む。

①発達環境科学教育プログラム

A. 領域横断的な専門科目

「発達環境科学基礎論」、「発達環境科学教育実習」、「発達環境科学演習」を新設し、これら3つの科目を系統的に履修させることで、発達科学と環境科学との協同知、融合知を備えた、人間発達科学を専門とする女性人材を育成する。

B. アジア留学生ネットワーク

近年、振興著しいアジア諸国では、心の発達を主体とした人間発達を環境といった視点から捉える人材の育成が急務である。本事業を核として、アジア留学生ネットワークを形成し、上記科目群と組み合わせることで、国際理解を備えた人材を育成する。

C. RAを活用する教育実習プログラム

発達、環境を専門とするRAを採用して、自ら設定する発達・環境の基本テーマごとに教育実習プログラムを実施し、研究と教育を統合する能力を育成する。

②教育プロセス基盤強化プログラム

A. 博士学位取得ステージ制

学位論文提出資格のための客観的指標を提供するために、教育ステージ、研究ステージの両輪からなる、ステージ制を設ける。教育ステージでは、コースワーク、知識確認のための試験、インターンシップなどをポイント化し、資格認定を行う。研究ステージも同様である。

B. 6年制アカデミックトラック

学部4年次、大学院5年間の教育プロセスを一体化し、基礎・理論・発展・先端といった高度専門職プログラムの展開が可能なプログラムを実施する。

以上の教育プログラムとともに、キャリアパス拡大部門を設け、教育プログラムと多様なキャリアパスとの有機的な連携、および、新たなキャリアパスの開拓とを実現する。

(3) 期待される効果

本プログラムは、「心の発達と環境の問題」を発達環境科学として捉える女性人材の育成を目的とするものである。しかし、この領域に限らず、女性研究者の養成とその研究活動の場を継続的に与えることが大きな課題となっている現状においては、自ら思考し研究計画を提案できる人材を育成することが、本質的に重要である。発達環境科学の分野では、実践的貢献を行う人材も多く必要であるが、それに留まらず、研究者としての貢献も求められている。発達環境科学の研究を多くの分野で有効に活用できる人材は、今後不可欠であり、キャリア獲得の機会も増えていくことが期待される。自ら思考する人材育成という命題に発達環境科学という新しいテーマをもって当たることは、研究の現場に直接に貢献するものであると同時に、大学院の充実という課題に対して貢献できるものである。

(4) 養成される人材像

この教育プログラムは、「人間の心の発達」、を核として、多様な研究領域（心理学、教育科学、社会学、発達臨床学、保育学、生活環境工学、福祉工学等）を母体とする人間発達科学、生活環境科学の横断的アプローチを身につけ、問題解決能力を自ら開発する女性人材、それは、高度な研究領域のみならず、社会実践の場でその能力を活かせるような女性人材の育成を目的としている。

また一方で、この教育プログラムは、教育研究を通して海外の研究者や学生との交流を積極的に支援するために、留学生ネットワークの形成や海外研修、国際シンポジウムを実施し、国際的に活躍する人材の養成を目指す。

この教育プログラムで育成される女性人材は、具体的には、国際専門職・研究職リーダー、生活環境コーディネータ、福祉施設や教育施設の設計・運営・経営の専門家、保育・子育て支援アドバイザー、各種教材開発プロデューサーなど、心の発達と環境との共同知（融和）を備えた人材である。

(5) 独創的な点

本教育プログラムは、ユニバーサルマインドの理念と本学の人間発達科学専攻の特色と融合させたものである。

人間の心の発達は、乳幼児期、児童期、就学期、青年期、中年期、高齢期とそれぞれの特性を有する。一方、IT環境のような新たな社会環境の出現、さらに経済発展の一方で環境問題や人的災害・自然災害を抱えるアジア諸地域など、現代は、社会環境・生活環境ともに大きく変動している。

このような発達と環境の問題は、教養教育のプログラムで扱われることも多い。しかし、心の発達の各段階での特性と環境との関わり合いを理解し、高度な方法論を身につけ、様々な方策を創出する人材（ユニバーサルマインド）の育成を目的とした教育プログラムは、教養教育では実現できない。これが本教育プログラムの最も独創的な点である。しかもこの教育プログラムは、本学の中期目標・中期計画：①女性研究者・女性のリーダー育成のための体制整備、②研究拠点の構築と支援、③地域社会への貢献と国際交流、④女性のライフスタイルにあった生涯教育の推進、に準拠した形で策定されている。つまり、この事業の実現は、社会に向けた本学のメッセージであるといえる。

以上の本教育プログラムの全体像を示した「履修プロセスの概念図」を次ページに掲載した。なお、図中の「発達社会科学専攻」は、改組により、現在、「人間発達科学専攻（博士前期）」となっている。

3. 教育プログラムの実施状況と成果

(1) 教育プログラムの実施状況と成果

①発達環境科学教育プログラム

A. 領域横断的な専門科目

○発達環境科学基礎論（平成18、19年度）

この授業科目は、多様な環境（「家庭環境」、「教育環境」、「居住環境」、「IT環境」、「福祉環境」等）の下での「人間の心の発達」の問題を、実践的専門家を含めた学内外の研究者による講義を通して、人間発達科学と生活環境科学の領域横断的な理解力を身につけることを目的としている。

平成18年度は、「テクノロジーと人間発達」や「遺伝・環境と人間発達」等をテーマとして、7人の講師を中心に、心の発達と環境との相互作用に関する授業を設定した。履修者は23名、最終合格者は15名であった。なお、

授業はビデオ編集を行い、DVD で閲覧可能とした。

平成 19 年度は、上記のテーマにプラスして、「社会生活とリスクコミュニケーション」等、リスク環境を中心とした 4 つのテーマを設け、4 名の講師からなる、授業

を設定した。履修登録者は 8 名で、全員合格した。なお、この授業は、公開セミナー形式としたため、毎回、40 名を超える参加者があった。

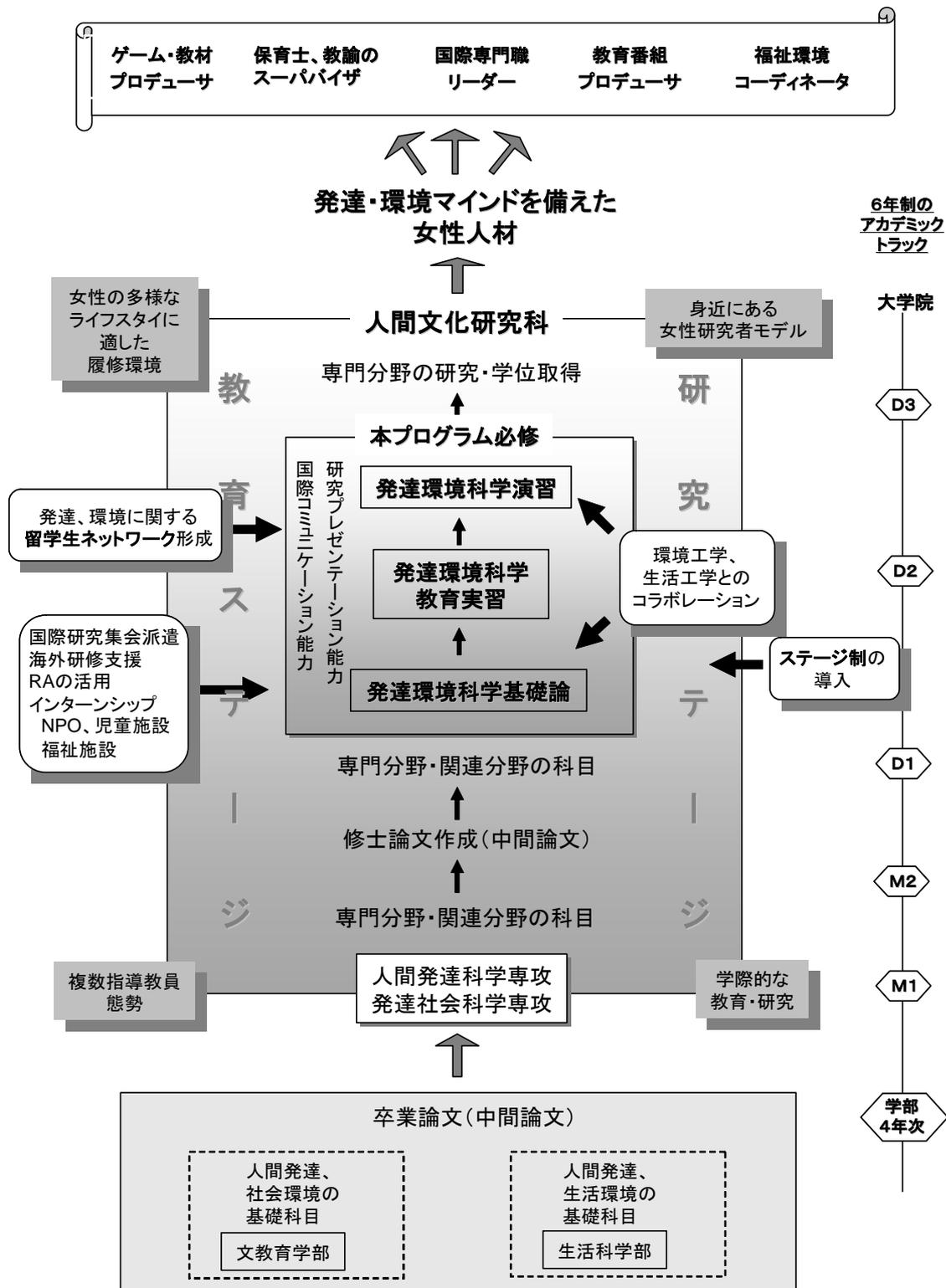


図 1 履修プロセスの概念図

○発達環境科学教育実習（平成 19 年度）

この授業科目は、発達／環境を主テーマとして、学生自らが企画／運営／実施を担当する、大学院における新しい教育実習授業プログラムである。このようなプログラムを実施することで、学生自らの研究教育能力、企画能力、管理／運営能力が育成されると考える。

具体的には、下記の個々のテーマに関して、学生自らが外部の研究者を招聘し、公開講座を開催した。数字は、担当の学生（RA）数である。

- ・ 生活環境と心の発達 3名
- ・ メディア環境と心の発達 2名
- ・ 遺伝 v s 環境と心の発達 2名
- ・ 認知機能発達の異文化比較 3名
- ・ 異文化教育環境と心の発達 5名

一例として、第 1 回目のポスターを掲載する（右図参照）。この会の参加者は 21 名であった。なお、学生には毎回、準備経過・実施内容・反省に関する報告書を提出させた（平成 19 年度活動報告書参照）。



この授業には 15 名の履修登録があり、全員合格となった。

○発達環境科学演習（平成 19 年度）

この授業科目では、まず学生の専門領域をいくつかの部門に分け、学生は部門ごとに下記の問題について調査発表し、それを全員で討論した。この授業科目の目的は、心の発達と環境の問題を、国境や文化を超えて共有し、さらに、それらの問題を今後のキャリアパス拡大に活かすことである。2つの問題とは、
1) 自分の所属する部門についてアジア諸国の諸問題
2) 自分の所属する部門に関して、研究職以外の期待されるキャリア、新たな職種・資格である。

この授業には 15 名の履修登録があり、全員合格となった（平成 19 年度活動報告書参照）。

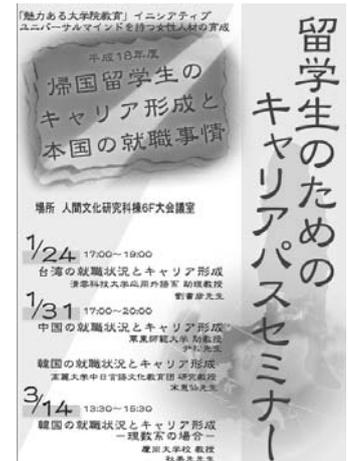
以上のように、「領域横断的な専門科目」の設定は、計画どおりに遂行された。3 つの授業科目を系統的に履修した学生は 12 名に上り、また教育実習の報告書や演習での発表（平成 19 年度活動報告書参照）も充実しており、

システマティックな教育の効果が表れたといえる。

B. アジア留学生ネットワーク

○第 1 段階 留学生のためのキャリアパスセミナー（平成 18 年度）（右下図参照）

留学生ネットワーク形成の第 1 段階として、本学を修了し研究職に就いているアジア諸国の帰国留学生 4 名を招聘し、「帰国留学生のキャリア形成と本国の就職事情」をテーマとして、セミナーを開催した。セミナーでは、留学生のキャリアパス形成についての現状を報告してもらい、質疑応答を通して、留学生の将来設計の指針を示す機会を設けるとともに、本国での留学生ネットワーク構築の可能性を検討した。各会の反応は、「このようなセミナーをもっと早く開催してほしい」という意見が多かった（平成 18 年度活動報告書参照）。



○第 2 段階 アジア各国での交流会（平成 18、19 年度）

留学生ネットワーク形成の第 2 段階として、本学を修了し帰国して研究職に就いている元留学生や在籍中の留学生を中心に、アジア各国で交流会を開催し、各国での留学生ネットワークを構築すること計画し、実施した。



実施場所は、中国・上海華東師範大学、台湾・台北教育大学、韓国・清雲科技大學、タイ・タマサート大学等である。左の写真は、上海華東師範大学での交流会の様子である。

○「心の発達と環境」に関するアンケートの実施（平成 19 年度）

留学生ネットワーク形成事業の一環として、アジア各国における、「こころの発達と環境」に関する学生の意識調査を行った。これは、「ユニバーサルマインド」教育プログラムの理念が、「こころの発達と環境の融和」にあり、発達／環境の問題が、国境や文化を越えた問題であり、これらの問題を共有し、解決策を探ることが、本教育プログラムの究極の目的だからである。

アンケートは「環境という言葉聞いて何を思い浮かべますか」(多肢選択式)のような選択式や、「心の発達やコミュニケーション能力の発達と環境」に関する自由記述など、4つの問いからなっている。

アンケート実施は、中国・上海華東師範大学、台湾・台北教育大学、韓国・清雲科技大学、また日本版は、お茶の水女子大学、甲南女子大学で行った。

際立った特徴は、「環境」という言葉に関して、日本、韓国、中国は90%以上の学生が「自然」を思い浮かべるのに対し、台湾では、「自然」は50%にとどまり、80%以上の学生が「学校」をあげている点である(平成19年度活動報告書参照)。

アンケートの詳細な分析とその活用は今後の課題であるが、留学生ネットワークの形成に関して、第1・第2段階を計画どおりに実行できたと言えよう。

C. RAを活用する教育実習プログラム

○発達環境科学教育実習

前記の「領域横断的な専門科目」の項を参照。

②教育プロセス基盤強化プログラム

A. 博士学位取得ステージ制

ステージ制は、学位論文執筆資格を明確化するための制度である。このステージ制を実行するために、「ステージ制認定委員会」を設け、平成18年度、19年度に、以下の活動を行った。

(平成18年度)

人間発達科学専攻を構成する5つの領域ごとにステージ制の規定を作成し(平成18年度活動報告書・資料4)、それを周知させた(HPでの開示等)。これらの規定を、平成19年度の新入生から適用し、認定委員会への申請・認定の手続きをとることとした。

(平成19年度)

ステージ制申請書・認定書を作成して、HP上で開示した。その結果保育・児童学領域より2件の申請があり、了承された。19年度は、ステージ制適用の初年度なので、申請は少なかったが、現在、認定試験など多くが予定されており、今後の活用が期待される。

なお、ステージ制は本教育プログラム終了後も引き続き運用されていくものであることから、平成20年3月に、人間発達科学専攻の専攻会議において、「ステージ制認定委員会規定」が正式に制定された。

以上のように、「博士学位取得ステージ制」は、計画ど

おり着実に実施され、また、新入生ガイダンス等での周知も徹底されていることから、今後の成果が大いに期待できる。

B. 6年制アカデミックトラック

この制度は、学部4年次と大学院5年間を連携させ、博士学位論文の早期提出を促進させることを目的としている。

以下、18、19年度の取り組みを紹介する。

(平成18年度)

学部4年次でも大学院博士前期課程の科目の聴講を可能とした。(心理学コース、応用社会学コース)

(平成19年度)

博士前期課程入試で推薦入試を実施した(心理学コース)。さらに、大学全体では、教育改革推進本部が設置され、学部、大学院の連携アカデミックトラックの形成に向けて、具体案の策定が始まった(平成19年度活動報告書参照)。この取り組みにおける6年制アカデミックトラックは、必ずしも上記のような「学部4年次と大学院5年間を連携」させることに限定してはいないが、文系、理系ともに、学部・大学院が連携して新たな教育カリキュラムを策定する動きが、大学全体でコンセンサスを得たといえる。

以上、「6年制アカデミックトラック」に関しては、大学院の個々のコース、領域で対応が図られているので計画は着実に進んでいるといえる。さらに、教育改革本部の設置とその主目的の1つに学部・大学院の連携があげられていることから、今後のさらなる進捗が期待できる。

③その他の取り組み

A. 学生への教育・研究支援

本プログラムにおける学生への教育・研究支援は3つの取り組みからなる。

○ RAの採用

指導教員の推薦により候補者を募り、審査によって、RAの身分を与えた。審査基準は、本プログラムの理念と学生の研究領域との関連性、学位取得可能性、将来性等であった。採用されたRAは、平成18年度16名(留学生7名)、平成19年度21名(留学生9名)である。採用されたRAには、希望者にノートパソコンを貸与した。このRAに対し、平成18年度には「発達環境科学基礎論」、平成19年度には、「発達環境科学基礎論」(既履修者は除く)「発達環境科学演習」(D1は除く)、「発達環境科学教育実習」(D1は除く)の履修を課し、「心の発達と環境」

に関する諸問題を共有し、さらに、様々なキャリア形成の可能性を検討させた。

そして、平成19年2月、20年2月に、RA各自の研究領域に関して、コンピュータによるプレゼン方式で、研究報告会を開催した。下図は、そのポスターである。



○研究実施・研究発表のための交通費支援

(平成18年度)

研究実施、研究発表を支援するために、公募形式で、交通費支援を実施した。この募集に関しては、短期間にもかかわらず9件の応募があり、全件了承した。

(平成19年度)

同じく研究実施・発表支援に関して、平成19年度は、第一期(用務期間:平成19年5月から9月)、第二期(用務期間:平成19年10月から平成20年1月)の2期に分け、公募形式で、交通費支援を実施した。この募集に関しては、第一期には国内15件、海外10件、第二期には国内12件、海外7件の応募があり、全件了承した。

2年間の用務内容をまとめると、以下のようになる。

- ・学会参加・発表 28件
(パサディナ、マレーシア、パース、上海等)
- ・調査研究 25件
(中国瀋陽市、内モンゴル、サンディエゴ等)
- ・研修・研究会参加 7件
(Tulane大学、琉球大学等)
- ・国際シンポジウム参加 1件
(Hanoi)

(1件の申請で複数の用務があるケースを含む)

申請者には、用務終了後、報告書の提出を課した。その項目は、「用務内容と成果」、「本事業との関連性」、「学位論文との関連性」、「感想」であったが、学位論文に向けて、有効な支援であったことがうかがえた(平成19年度活動報告書参照)。

OE-Learningによる英語プレゼンセミナー

学生への研究・教育支援の第3として、E-Learningによる英語プレゼンセミナーを実施した。その目的は、国際学会等におけるプレゼンテーション・スキルを習得し、世界レベルの研究者と対峙する能力を身につけることである。以下は、その概略である。

【対象】 博士後期課程の大学院生

【登録者】 32名

【講習内容】講習は、E-learningによるプレゼンテーション・スキルの学習(6段階30項目)、プレゼンテーションの発表、ネイティブ講師による指導からなる。

【結果】登録者32名中25名が、合格した。

この講習の成果は、前記「RAの研究報告会(平成19年度)」に現れた。発表プレゼンテーションのうち、9件が英語で行われたのである。

B. キャリアパス支援

大学院生キャリアパス拡大に向けて、「大学院生のためのキャリアパスセミナー」(平成18、19年度)、「留学生のためのキャリアパスセミナー」(平成18年度)、「異分野に進出した先輩へのインタビュー」(平成19年度)を行った。

○大学院生のためのキャリアパスセミナー

第1回平成19年2月21日(水)

演題: しなやかに生きた知恵と技術 ―現代女性のキャリアの記録―

講師: 労働政策研究研修機構統括研究員 奥津眞理先生
参加者: 21名

第2回平成19年5月16日(木)

講師: 辰巳哲子先生 リクルートワークス研究所
演題: キャリア教育で実現したい未来
参加者: 19名

これらのセミナー後にアンケート調査を行ったが、その中では、「キャリア開拓への動機づけ」が高まったという感想が多かった(平成18、19年度活動報告書参照)

○留学生のためのキャリアパスセミナー

前記、「留学生ネットワーク」の項参照

○キャリアインタビュー

本教育プログラム・キャリアパス開拓部門では、キャリアパスを拡充するためのさまざまな方策を検討してきたが、その一環として、多彩なキャリアパスを持つ卒業生にインタビューを行った。

経済産業省在職中に学位を取得した児玉歩氏、心理学で学位取得後、工学部に就職した薬師神玲子氏、心理学

の学位取得後、情報系の学部就職し、現在育児休業を取得している田中美帆さんの3名である。

このインタビューの内容を冊子体にまとめ、さらにHP上にPDF版として開示した。タイトルは、「博士の愛するキャリア、博士を愛するキャリア」である(右図参照)。



本プログラムの1つの目的は、大学院生のキャリアパスの拡大にある。当初の計画には具体的にはあげてなかったが、上記のような企画を実施したことは、大学院生に大きな反響を呼び(アンケート結果:各年度活動報告書参照)、成果はまだ目に見えないものの、今後、留学生を含む大学院生のキャリアパス拡大につながると期待できる。

C. 学術講演会・セミナー・学術交流会

心の発達と環境の問題が、先端的な研究や地域・社会の問題といかに関係しているかを理解するために、学外から第一線で活躍する研究者を招へいし、公開講演会や教育セミナーを開催した。また、海外の学生との対話を重視し、国際的な視野を有する研究者の育成を目指して、国際学術交流会を開催した。

○学術講演会

本講演会シリーズは、環境面と心理面の関わり方を、理系的視点、文系的視点、双方の融合した視点といった多面的な角度から捉えてみるというセンスを養うことが第一の目的である。またそれぞれの分野で国際的に活動されている専門家の方々に、ご講演いただくことによって、先端の知識を得ると共に、それら分野の国際的水準が如何なるものであるのかということについても考えさせることも目的である。

第一回 平成19年6月21日(木)

演題「生涯発達と生活環境」

講演者 安梅勅江 教授

(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

第二回 平成19年6月28日(木)

演題「ミレニアム生態系評価と生態系の管理」

講演者 鷺谷いずみ 教授

(東京大学大学院農学生命科学研究科)

第三回 平成19年7月5日(木)

演題「人類進化の生態学的、心理学的側面からのアプローチ」

講演者 長谷川真理子 教授

(総合研究大学院大学先導科学研究科)

講演後の質疑応答の後、参加者には、講演内容への感想をアンケート形式で記入してもらった。その内容は、「第一線の研究に触れられた」等が多く、本講演会の目的にかなったものであった

○教育セミナー

「ユニバーサルマインドをもつ女性人材の育成」の一つの方向性を、社会を構成する能動的市民の育成と捉え、この問題に関する「シティズンシップ教育の開発研究プロジェクト」セミナーを共催した。

シティズンシップ(市民性)教育は、社会を構成する能動的市民の育成をめざすものであり、「領域横断的な専門性を備え、国境・文化を越えた問題を共有できるマインド」を追求する本イニシアティブの課題とも密接に関わっている。

第1回 平成18年12月2日(土)

テーマ:シティズンシップの教育・海外での調査報告
～ミネソタとイギリスで行った聞き取り調査から

第2回 平成19年3月24日(土)

テーマ:政治教育の現状と課題

第3回 平成19年年9月1日(土曜日)

テーマ:シティズンシップの教育実践について語りあう

第4回 平成19年10月13日(土曜日)

テーマ:フランスのシティズンシップ教育

○国際学術交流会

下記のテーマで、国際交流を主とするセミナーを開催し、学生の積極的な参加を促した。

第1回 平成19年年5月8日

テーマ 日本と米国における心理臨床家の役割と教育
～その現状と課題～

参加者:本学:教員2名、本学大学院生 10名、留学生2名海外(米国):教員2名、大学院生10名

第2回 平成19年7月9日

テーマ 台湾と日本の学校における予防的とりくみ
～健康な子どもの成長を支援する～

参加者:本学:教員1名、本学大学院生等 10名、海外(台湾):教員1名、大学院生等17名

このような講演会や学術交流会は、本プログラムの当初の計画にはなかったが、本プログラムの担当者が、さまざまな形で、大学院生への教育・研究支援の企画を打ち出し、本プログラムの精神である「ユニバーサルマイ

ンドを持つ女性人材の育成」の実質化を図ったといえる。

(2) 社会への情報提供

①HP(ホームページ)での情報提供

採択年の平成18年9月より、大学のHPに情報掲載。さらに平成19年1月より、英語版のHPも作成。以後、随時更新している。

②活動報告書の作成と配布

平成18年度活動報告書、平成19年度活動報告書を作成し、学内外に配布。

③本プログラムを紹介するリーフレット(日本語版、英語版)の作成と配布(平成18年度)。

HPにも掲載し、PDF版でダウンロード可能。

④大学院生のためのキャリアパス形成支援インタビュー集「博士の愛するキャリア、博士を愛するキャリア」の作成と配布(平成19年度)。

HPにも掲載し、PDF版でダウンロード可能。

⑤本プログラムの概要と2年間の成果をまとめたカラー冊子「UMIND REVIEW」の作成と配布(平成19年度)。

HPにも掲載し、PDF版でダウンロード可能。

4. 将来展望と課題

(1) 今後の課題と改善のための方策

本教育プログラムは、それぞれの企画におけるアンケート結果(活動報告書参照)に見られる学生の満足度を考えると、現在の時点では一応の成功を見たといえる。その成功には、多くの学生をRAとして雇用し、その学生たちを中心として、教育プログラムを実施してきた、という面が大きい。また、キャリアパスの拡大も、学生たちから様々な提案や具体的な方策が提示された。しかしそれが、現実に彼女たちのキャリアパスの拡大につながるか、特に、このプログラムで育成を目指した人材が、2年後、3年後に育ちあがるかは、現時点では不明である。

これらを踏まえて、今後の課題は、以下のようにまとめることができよう。

①教育プログラム参加への動機づけ

教育プログラムを実施する上で、大学院生の動機づけを高めるには、現実的には、何らかの経済的支援が必要である。その1つが、RAとしての雇用であろう。このような雇用を保障する経済的基盤を考えることが必要である。このような基盤整備のためには、外部資金獲得のための組織的取り組み、さらに外部資金の間接経費の効果的運用が考えられる。

②キャリアパスの実質化

多様なキャリアパスの拡大を図るには、学生の意識改革のみならず社会との連携が必要である。従って、このような大学院支援プログラムを申請・実施するには、特に文系・社会科学系の場合、大学院と社会との連携プログラムを計画することが肝要であろう。

(2) 平成20年度以降の実施計画

平成20年度以降、本プログラムを継続するための基盤として、以下の3点があげられる。

①人間発達科学専攻・担当教員の継続的協力

②本学の教育・研究支援システムの強化

③他のプロジェクトの支援

本学では、平成19年度に教育改革本部が設置され、その目的の1つに「学部大学院の連携強化」があげられている。さらに平成20年度には、従来の国際教育センター等を統括した「国際本部」が設置され、国際的な連携を強化し海外拠点形成を視野に入れている。

また、人間発達科学専攻は、現在、2つの大きなプロジェクトを実施している。1つは、グローバルCOE「格差センシティブな人間発達科学の創成」であり、もう1つは、特別教育研究経費による「コミュニケーション・システム開発によるリスク社会への対応」(CSDプログラム)である。

これらの観点から、本教育プログラムの多くの部分は継続実施が可能な体制となっている。

具体的には、「領域横断的履修プログラム」は、隔年開講という形で継続的に実施される。これは、DVDに保存してある平成18・19年実施の映像データを活用するとともに、本学教員による担当で運営される。

「留学生ネットワーク」の維持・発展は、CSDプログラムの国際連携プログラムで継続される。また、本学の「国際本部」が中心となり、これまで以上に、海外との連携を強化する方針であるので、CSDプログラム終了後も、「留学生ネットワーク」は維持される。

「博士学位取得ステージ制」や「6年制アカデミックトラック」の実施は、グローバルCOEプログラムに組み入れられている。また、これらは、「お茶大モデル」として現学長が主導しており、本学教育改革本部の主眼でもあるので、全学的な展開が期待される。

以上のように、本プログラムの主要部分は、今後も、恒常的・自主的な展開が可能な体制となっている。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における評価

【総合評価】

- 目的は十分に達成された
- 目的はほぼ達成された
- 目的はある程度達成された
- 目的は十分には達成されていない

〔実施（達成）状況に関するコメント〕

ユニバーサルマインドを備えた、高度な専門領域のみならず社会実践の場でその能力を生かすことのできる女性人材を育成するという目的に沿って、領域横断的な専門科目の新設、留学生ネットワーク、教育実習プログラムなど多様な計画が着実に実施されている。また、全学的な取組への展開が視野に入れられている博士学位取得ステージ制については波及効果が期待される。

情報提供については、ホームページや刊行物、リーフレットなどの多様な手法により、積極的に行われている。

今後、アンケートの詳細な分析と結果の継続的な取組への活用、リサーチアシスタントの活用で成果を上げた分野での改善・充実に向けた方策を検討することなどにより、自主的・恒常的な展開を図ることが望まれる。

（優れた点）

- ・領域横断的な専門科目の展開、博士学位取得ステージ制、6年制アカデミックトラックの実施は、本教育プログラムの目的である問題解決能力を自ら開発し、社会実践の場でその能力を活かすことができる人材を養成するモデルとして評価できる。

（改善を要する点）

- ・養成しようとする多様な人材に対応した科目群や、キャリアパスセミナー等の大学院の教育課程における位置づけを明確化し、多様なキャリアパス形成に向けた方策の一層の充実を図ることが必要である。